

---

# 赤い瞳で悪魔は笑う（仮題）

tei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い瞳で悪魔は笑う（仮題）

### 【Nコード】

N1589R

### 【作者名】

te i

### 【あらすじ】

眠り続ける妹を助けるために悪魔と契約した主人公が、負傷したり何だりしたりします。若干中二病的な設定がちらほら見受けられます。

まだ完結していないので、ちまちま更新していきます。他サイトにも投稿しています。

## 序

「人に対する興味を忘れた人間ほど、哀しいものはないよね」

そいつ　葉暮紅也はくれこうやは、嘲るような笑みを浮かべながら、俺に向かつてそう言った。

「だってさ、人間が他の人間に対して抱くべき当然の感情を持ってないってことはさ」

もったいぶって、紅也は言う。

「その人間は、どこまでも、本当に、真の意味で」  
その真っ赤な唇を、片方だけ吊り上げて。

「コドクって、ことだものね」

俺を見下して。心の底から馬鹿にして。

真っ赤な悪魔は、そう言った。

咲屋灰良さくや はいらが、そこにいた。

いつのまにか。教室から廊下に出るその扉を、塞ぐようにして立っていた。

「……更衣君こいぬ」

何だよ、と、俺は怯む。いつもの咲屋と、雰囲気の違いすぎて。後ろで、くくと笑う紅也の気配を感じる。咲屋は紅也に気づいているのかいないのか、灰色がかつたまっすぐな目で、俺を見上げた。そして。

「御免なさい」

え、と思ったのと同時に。重い、鈍い、強い衝撃が体全体に伝わったのを感じた。本当に、御免なさい。咲屋はちっとも悪びれずに、俺を貫いたナイフから手を離れた。

ナイフ？ 何で。

状況に頭がついていかず、いつの間にか咲屋が視界から消えていたことにも気づかなかつた。

ナイフが、今、俺に刺さっているのか？

そして、刺したのは咲屋、なんだよな？

腹に、物凄く痛みを感じる。刺されたのだから当たり前なのだけど。

おいおい、冗談じゃない。悪魔と契約を交わした直後にこれかよ。死んだら魂、持ってかれんのかな。ってか、何だって心臓とか頸動脈を一思いにやってくれなかつたんだ。腹部なんて、死ぬのに半端でなく時間がかかる。切腹するのに介錯が必要なのも苦しみを長引かせないためだったはず。ゆっくりゆっくりと血を失って、死ぬまでその痛みに耐えなくてはいけないというのに。

「殺られたね」

背後で、赤い悪魔が言う。やっぱり、微かにあざ笑っているかの

ような含みがある。

ああ、殺られたさ。でも、まだ死んではない。このままだと死ぬのは確実だけだ。

「恨まれてたの、君？」

明らかに楽しんでる口調で、紅也は言う。くそっ、この悪魔めが。

「ナイフは抜かないほうがいいと思うよ。血、出るから」

確かに、それはそうだ。でも、血ならもうかなり出ている。制服を真っ赤に染め上げている真っ最中。

うわっ……。

声にならない声を上げて、俺は膝をついた。教室と廊下の、境目に。ドアをスライドさせるための金具に膝を打ち付けたが、腹部の痛みがせいであまり感じなかった。……そっか、血がないと、やっぱり力って抜けるものなんだ。

上手く回ってくれない頭をフル回転させて、考えたのはそんなことだった。

やばいな、これ。……きつとこの調子で俺、ゆっくり死んでいくんだ……。

「おやおや、弱気だね、君。そのままだと、まあ確かに死んじゃうけど」

紅也はまだ背後で言う。助けしてくれる気配などない。……まあ当たり前前か。悪魔だもんな。それにしても。

俺は、何故咲屋に刺されたりなどしたのだろう。やっぱり、殺そうって気はあったんだろうな。手品でもない限り、普通殺意があったと判断すべきだろう、これは。

うーん、でも。

腹部の痛みでガンガンいっている頭で、俺は考える。

俺、何かあいつに恨まれるようなこと、したっけか？

『御免なさい』

あいつ、そう言ってたよな……。

明らかに失血によるものと思われる眠気に襲われながら。

俺は、咲屋の言葉を思い出していた。

『御免なさい』

。

御免で済むような問題ではないですよ、咲屋さん。

……畜生。

そして、俺の意識はそこで途切れる。

最後に見たのは夕日に染まる廊下と、そこに立って俺を見下ろしている赤い悪魔。

表情は、陰になって見えなかった。

「君、僕と取引しない？」

真っ黒な髪に、似合いすぎるほど似合う真っ赤な瞳で、葉暮紅也は言った。

男子にしては長くて、肩まで垂らしたその髪は、紅也の中性的な整った顔に、ぴったりだ。白い顔は小作りで、その中で二つ、暗い光をたたえた双眸は、ひたと俺を見据える。

……取引？

俺がいぶかしげに目を細めると、紅也はくくく、と咽喉の奥で笑う。

「君は、人間に対しての興味を失っている。……僕は、それを治すことができるよ」

……。

「でも、僕は悪魔だからね。供給ばかりでは割に合わない」  
だからこそ『取引』さ。

そう、紅也は言った。夕日に染まっていく教室で、俺を見下ろすように、見下すように。

あざ笑いながら。

俺は、何をすればいいと？

聞くと。

紅也はその顔を俺に思い切り近づけて。

充血したのとは違う、宝石のような赤い瞳で、俺の耳元に囁いた。  
「僕の魂を、見つけて欲しい」

まるで悪魔のように。黒くてさらさらの髪が、俺の肩と顔にかか  
る。

「昔、ある人間に騙されてね。身体はここにあるけれど、魂を持ち去られてしまった。ここで喋ってる僕は、どこかにある魂で考えていることを、身体に喋らせているに過ぎない。魂に目があればいい

んだけどね。そういうわけにもいかないしね」

自分で探せばいいじゃないか。

相変わらずすぐ目の前にある、女子と見間違えるような綺麗な顔に向かつて、俺は言う。

「……この身体は制限つきなんだ。それに、君の『病気』を治すためには、僕の魂が、この身体になければいけない。君が魂を探し当ててくれれば、僕は君を治そう。一考に価する取引だと思うけど」「そんなことはない。別に俺は今、この『病気』とやらで困っていないし、治して欲しいとも思っていない。」

俺が黙っていると、紅也はふつと微笑んだ。しかし視線は緩むどころかより鋭く、獲物を狙うようなものになる。そう、それはまるで。

真っ赤な。

悪魔のような。

紅也、お前、悪魔なのか。

俺の呟きのような問いに、紅也はきよとんと首を傾げて、その射抜くような視線を、少し和らげた。

「さつき、そう言ったでしょ。今頃反応するなんて……面白いね、君」

くつくと笑って、紅也は俺から離れた。

「そうだよ、僕は悪魔さ。だから、『取引』に応じてくれるなら、どんな願いでもそれに見合ったものをかなえてあげられる」

赤い悪魔は、そう言った。夕日の光で、全身赤く染まっっていて、本当に。それは。

「例えば、そうだね。……君なら『病気』以外にも かなえて欲しい、いや、かなえたい願いが、あるんじゃないかな」

「妹さん、とか？」

「うん、きつと君の中での優先順位はそっちの方が上だね。何なら

『病気』の方でなく、そっちの方、どうかしてあげようか?」

猫なで声で、紅也は言う。

俺は黙り続ける。

心の中の動揺を、知られたくはなかった。でも。

悪魔は、何もかも見透かしたような表情で、俺の顔を覗き込んだ。

また、あの鋭すぎる視線で。

「『取引』、応じる?」

その、真っ赤で濁り一つない、澄み切った、まるで血のような眼を見て、俺は。

俺は。

「あ。目、覚めたね」

澄んだ声が、頭の横で聞こえた。息がかかるかと思うくらいに近くで。

紅也？

「うん、僕だよ、更衣君」

なんで俺、こんな所に寝てるんだ……？

「ハハ、忘れちゃったの？ 更衣君」

ここは……保健室、だろうか？ 全体的に白っぽい、小さな部屋。俺は、その窓際に置かれた清潔なベッドに寝かされていたらしい。声のした方へ目をやると、紅也が無邪気な笑顔で、そこにいた。

その、赤い眼を見た時。

思い出した。

ああ、そうか、俺……刺されたんだっけか。

咲屋灰良に。

「そうそう。ようやく思い出したね。更衣君、あれから僕が先生呼んできて助かったんだよ。ここ、病院ね」

病院だったのか。……紅也が、先生を呼んでくれた……のか。

「勿論。何せ君に死なれたら」

くすりと笑んで。

契約が台無しになっちゃうからね。

……っ。

思わずベッドから上体を起こすと、腹がずきんと痛んだ。

「急に動いちゃ駄目だよ、出血するよ」

……。

無言で睨みつけると、紅也は何故か、笑みを浮かべた。

まるで、勝ち誇ったような。

？

「君の身の安全は僕が保証するよ。契約が成就するまでは、死なれると困るからね」

死なれると、困る……？

「ああ、言っただけ。一度した契約は、それを完遂するまで他の契約に手を出せないんだ」

だから一つずつ、きちんとこなすってことだね、と。

紅也はふふん、と鼻で笑った。

「だ・か・ら、君はもう自殺もできないよ。いくら辛くとも、死ぬないってこと。肉体的に衰えてきても、死にそうになったら僕が新しい身体を作っただけだからね」

……不死、みたいなもんか。

「まあ、そう考えてくれて結構だよ。とにかく、お腹にナイフを刺されたくらいじゃ君は死なない。死ぬはずがない」

死なれたら、困るからか。

ため息が出る。死にたくても死ねないってのは、なかなか辛いものがあるな。

「にしても君、本当に面白いね。僕が悪魔だつていうのも普通に信じてしまうし。今だつて、『不死』なんていう突拍子もない話を簡単に受け止めているし」

嘘だつたらどうするのさ。

そう言っただけ、と笑う。赤い眼を、線のように細める。

俺はまた一つため息をついて、紅也を見る。

お前が悪魔だつてのは確かだろうし、それなら『不死』って言うのも本当なんだろうと思っただけだ。

紅也は、やっぱり面白いね、と笑う。

「やっぱり君からは他人に対する興味っていうものが、根本的に抜け落ちてしまっているよ」

放っておいて欲しい。仕方ないし、直して欲しいとも思わないのだから。

「でも、気になるんだよ。個人的にね。君、いつからそんな風にな

ってしまったのさ」

本当に興味津々といった様子で、紅也は俺のベッドの傍に腰掛ける。

……話さなきゃ、駄目か？

「うん、いや、強制じゃないよ。ただ、教えてもらえたらお礼はする」

いや、別に、礼はいらないけど。

「ふうん、そう？」

それじゃあ……。

俺は一度、軽く深呼吸をして。

話そうか。

話し始めた。

クリスマスが近づいてきた。

普段そう寒くはならない私の町にも初雪が降り、子供達のはしゃぎまわる季節。冬の訪れ。そして、それを代表する十二月の行事クリスマス。それは同時に、私にとってとても大切な日でもある。兄の誕生日だ。

兄は高校二年生、私は中学一年生。四歳違いの私たちは、滅多に喧嘩などしない。そっけないけれど優しい兄は、私が欲しがると譲ってくれる。私が泣くと謝ってくれる。いつだって、兄は私を守ってくれていた。私はそんな兄が大好きだ。

そう。クリスマスは、兄のバースデーなのだ。プレゼントはもう買ってあり、机の中に入っている。兄の好きなブランドの、腕時計だ。結構高価だけれども、お小遣いを貯めて手に入れた。私だって、そのくらいのお金は持っている。一年間、このためだけに貯めているのだから。

私が今歩いている通学路には、人がほとんどいない。こんな夕暮れ時に歩いていると、薄く積もった雪がオレンジ色に染まって、さえぎるものがない道路がとても綺麗に見える。だから、わざわざ少しだけ遠回りになるこの道を選んで帰っている。今日は、部活が早く終わったため、いつもより時刻が早い。急ぎ足で、私は歩く。

日が落ちるのは早く、いつの間にか空には星が輝いていた。オレンジ色だった道は暗く閉ざされかけ、一枚の絵のよう。

遠くで犬が鳴いている。もう、夜なのだ。私は、足を速める。あまり遅くなると、心配をかける。

両親に？ いや 兄に。

「……………」

え？

どうして今私は、両親でなく、兄に心配されると思ったのだろうか。どうして、いつも私を心配する両親ではなく、兄に……。

心の中で反芻しながら。

私は、いつの間にかたどり着いていた自宅のドアに、手をかけた。

クリスマスが、近づいてきていた。

初雪も降り、寒い季節だ。学校の中での話題もクリスマス一色で、俺は少々うんざりしていた。賑やかなのは苦手だ。人が多く集まるところも。

そんなわけで、俺はいつもはそれほど通ることのない、大通りを離れた小さな道を歩いていた。夕暮れ時で、夕陽を雪が反射して、眩しい。目が痛い。

ちっ。

俺は舌打ちをして、目を細めて歩く。明るいのも、好きじゃない。時々、俺は夜行性の小動物なんじゃないかと思う。例えばネズミ。広場に出されると、わざわざ端を駆けて行くネズミ。俺は、そんな感じだ。妹には、しょっちゅう注意されている。

お兄ちゃんはただでさえ近寄りがたいのに、そんなしかめっ面してたら友達出来ないよ？

無用の心配だ。俺は別に、四六時中『しかめっ面』をしているわけではない。学校ではそれなりに、人のよさそうな笑顔を作ったりもする。人のよさそうな『更衣 雨夜』<sup>あまや</sup>を演じているわけだ。その、俺が演じる『更衣雨夜』を本物の俺だと信じこんで接してくる『友達』と、俺は過ごしている。まさか彼らも『更衣雨夜の友人』を演じているわけではないだろうが、……まあどうでも良い事だ。

夕陽の中を歩いていると、俺と同じようにたった一人で歩いていく、少女の後姿が見えてきた。妹の学校の制服姿だ。どことなく見覚えがあるような気がするが……、妹ではなさそうだ。今の時間、

妹は部活をしているはずだ。……ならば、それならば。一体、だれ  
だったんだろう？

考えているうちに、少女の姿はふいっと消えてしまった。本通に  
でも、入ったらしい。

まあ、良いか。

早く帰ろう、寒いし。

俺は、緩やかな坂を一人、下っていった。

一面、血の海だった。

「…………え…………」

言葉が出てこず、意味不明の叫び声が耳に入ってくる。うるさいな、と思っただら、それは私の口から出た声だった。悲鳴だった。

「…………」

放っておくといつまでももれ続けそうな自分の声に苛立って、私は口を押さえた。歯まで鳴り出すので、あごも押さえる。

そして、目を見張る。

夢でも幻でもないのだ、これが現実。

血、血、血。

生臭い、鉄臭い、目に鮮やかな、真っ赤な血。赤、赤、赤。一面真っ赤に染まっている。

壁が血で、真っ赤に。床が血で、真っ赤に。食卓テーブルから血が滴って、みちやみちやと粘着質の音を立てている。

みちや、みちや。みちや、みちや。

ぴちゃん。

「…………あ…………」

水音に、我に返る。そうだ、このリビングには血の主がいない。

これだけの血だ、死んでいるに決まっているのだが、ここには肝心の死体がなかった。

死体。死体。したい、シタイ。

……………誰の？

父だろうか、母だろうか。それとも、もっと別の？

私はよろよると、リビングのドアを開けた。

一面、血の海だった。

……はあ？

呆けたように呟いて、俺はリビングのドアにもたれた。

……何だよ、コレ。

意味、わかんねえ。

リビングが血だらけだ。……ってか、これって血だよ……な。粘

着質の……赤い、液体。

鉄臭いし……やっぱり、血だ。

でも、どうしてこんなに大量の血、が……？ オカルト現象？

いや、もっと現実的に、やっぱ

殺人？

呟いて。俺はきよるきよると辺りを見回す。人影はない。うちで殺人……てことは、父さんか、母さんか。今日はたまたま父さんの仕事は休みで、家にいたはずだ。もしかしたら、二人とも……？ そうだな、これだけの血だ、一人ではあるまい。

……。

どうしてだか、妙に落ち着いていた。こういう時、パニックに陥ることができたら、どんなに楽だろうと思う。こんなこと思ってる時点で、もう駄目なのかもだが。ともかく、俺は落ち着いていた。警察が来た時に疑われないよう、無駄な箇所には一切手を触れず、リビングには一歩も踏み入らず、ただ廊下から眺めているくらいに泥棒か怨恨か、それとも通り魔的犯行か。

いずれにしても、家人が死んでいることは明白だった。父か、母か、妹か。

……妹……。

妹！？

俺は、はっとした。さっき見た少女がもし妹だったとしたら？

妹が家に帰ってきたとき、そこにまだこの惨事の犯人が潜んでいたとしたら？

……今まで静かだった心が、急にざわついた。

ここには誰の死体もない。

誰の死体もない。

ということは。この家のどこかに、まだ死体が　この血の主が。  
父か母か妹か。

……………！

いても立つてもじつともしていられず、俺はリビングのドアを閉めた。しんと静まり返った家の、階段を駆け上がる。

死体を確認するために。

妹は死んでいないと、確認するために。

「へえー……で、妹さんは？」

紅也は看護人用の丸いすに腰掛け、器用にも足を折り曲げ、椅子の上で体育座りをしていた。生きてたよ、と俺は答える。

「そりゃ良かった。ま、今生きてる以上当たり前だけれど」

ふふ、と笑って、紅也は言う。俺はベッドに横たわったまま、紅也に顔を向けて話を続ける。

妹は、バスルームにいた。制服を真っ赤に染めて、両親の死体と一緒に、シャワーから流れ続けるお湯の湯気の中に。放心したように、手には包丁を持って。

「お兄ちゃん」

そう呟いて、妹は、気を失った。

それから二年間、ずっと意識は戻らない。

「へええ……。だから、『眠り姫』なんだね」

あ？

「君の、イメージさ。妹さんに対する、イメージ」

何だ、それ。イメージ？

「うっん、自覚症状ないのか。ま、どうでもいいよ」

……………

「そっかそっか。そういう経緯があったんだ。二年前、……という  
と、君が高校一年生、妹さんは中二かな？」

どうして妹の年齢まで分かるのか、という疑問は、紅也が悪魔だから、という事実によってかき消される。

正確には、俺が中三の時の冬だ。……ん。

「ん？ どうかした？」

紅也は少し首を傾げて、少女のように微笑む。見た人間皆、目眩を起こしそうになるであろう微笑み。でも、『病気』の俺には通用しない。

どうしてお前、妹と俺の歳の違いについては分かったくせに、今の事件については知らなかったんだ？

俺の問いに、紅也は一瞬目を見開き、「ああ、」と納得したように肯いた。

「君の心の中って、覗きづらいんだよ」

「……覗きづらい？」

「僕はね、人の心を読む。心の中に刻まれた、記憶、経験、思考、etc……なんでもね。でも、僕に心を開かない人間の心は、読めない」

俺が、そうだと？

「そう。君なら分かると思うけど」

一旦言葉を切って。紅也はまた、あの見下すような目つきで。俺を見下ろす。

「他人に興味を持ってない人間は、他人に対して心を開かない」

「……」

「決して、ね」

低い声で付け足して、紅也はにいつと笑う。悪魔の笑い。純然にして高潔な、どこまでも邪悪で、美しい。

背筋が寒くなったが、どうしてなのかは分からない。

こいつが悪魔だからか、それとも。

こいつが、こいつだからか。

「だから、妹さんについては君の中のイメージと、表面的な情報についてしか、覗けなかった」

そういうわけさ、と紅也は薄く笑う。

そういうわけか、と俺は苦笑いする。

「まあともかく、教えてくれて有難う。本当は、教えるの、嫌だったんでしょ」

あまり有難がっていない、尊大な口調で、悪魔は赤い瞳で言う。

「お礼、本当にいらないの？」

「……」

悪魔からのお礼、なんてろくなものではないに決まっている。こいつのことだから『お礼の対価』として何かよこせなどと言ってくるかもしれない。

などと考えていると、紅也が椅子ごと近寄ってきた。そして。

俺の額に、口づけをした。

……。

「まあまあ、そう睨まないで。これは、僕からのお礼」

………？

急にうとうとと眠気が差してきて、俺は目を閉じた。

「君が今一番見たい夢を見られるよ。お休み、良い夢を」

……紅也………？

紅也の顔はすぐにぼやけて。

俺は、眠りに落ちた。

ぴちゃん、ぴちゃんと。

バスルームには水が滴っていて。その両端には、お父さんとお母さんの死体があつて。その中央には。

兄がいた。

兄が。包丁を持って。

放心したように、立ち尽くしていた。

「 x x x 」

兄は、私の名を呼んで。

そして、私に近づいてきた。

私は、動けずに。

動けずに、そこに、立っ

ていて。

兄は

そして、全てが闇に飲まれていった。

雨が降っている。

俺は一人で、学校からの道を、歩いている。傘を忘れてきたので、仕方なくずぶ濡れで。

ぴちゃん、ぴちゃんと。

雨の滴が道にはじけ、そのたびに音を立てる。

突然、水音が止んだ。頭上には傘があつて。隣には、妹がいた。

お兄ちゃん、傘持ってたかなくちゃ、駄目じゃない。

高すぎず低すぎず。その澄んだ声が、耳元で響く。

悪いな、 x x x 。

何故か、妹の名前は聞こえなかった。

夢……なのだろうか。

俺は思う。

もしこれが夢だとしても、俺は今、幸せなんだろう、と。

「更衣君」

弱弱しいとも取れる、少し高いような中性的な声が、俺の背後から聞こえた。

？

「更衣君、このプリント、先生から」

振り向くと、黒い髪が少し長めで、女子と間違えそうな整った顔の、でも間違いなく男子の 葉暮紅也が、俺にプリントを差し出していた。

ん、サンキュ。

受け取ると、紅也はにこりと笑って、自分の席へと戻っていった。

紅也は不思議な奴だ。

何時も一人でいて、物凄く静かだ。今のように用がない限り、誰かに自分から話しかけるといふこともない。それでいて、存在感が薄いわけではないのだ。

不思議な奴だった。

もつとも、他人に対して興味を持ってない『病気』である俺には、その、紅也の特徴のどれ一つにも、興味をそそられはしなかったのだが。

紅也の顔にも。

紅也の髪にも。

紅也の声にも。

紅也の 眼にも。

眼……？

真っ赤な。日本人のはず、なのに。名前も日本名だし……なのに。なのに、どうして。

眼が赤いんだろう？

兎も確か、眼が赤かったよな。……まあ、紅也は人間だけど。で

も、赤い眼の人間なんて、日本人にはそついなはず。……睡眠不足、か。

勝手に結論付けて、俺は教室を出る。担任に、呼ばれていた。

担任の桜見亜入先生は、茶髪で短髪で元暴走族所属で、未だに教師とは思えないほどのタイトなミニスカート（しかも派手な柄）を着用し、サングラスを雨の日でも掛けていて、口調が男のような、女教師である。その教師から、朝のホームルームで直々に、お呼びがかかったのだ。

全く……なんだってんだろうな。

さつき紅也から受け取った『先生から』のプリントを、歩きながら開いて読む。

『ちゃんと来るように』

との赤い文字が、白い紙の中央に踊っていた。

……………。

何も、赤くしなくても。他にペンはなかったのか。

案外と丸い文字につっこみながら、俺は階段を降りる。職員室は二階。今俺がいた教室は四階。二階分降りなければいけない。

はあ、とため息をつきながら、俺は降りていく。本当に、いったい何の用だろう？ 試験でそこまで酷い点数を取った覚えはないし、友人関係のトラブルなんていうこともない……何か呼び出しを受けようかな当たりは、全くといってない。どうして、俺が呼ばれたのだろうか？

考えながら歩き、職員室までたどり着く。ノックして、入る。

桜見先生の群を抜いた派手な服装は、こういう時に便利だ。灰色やら黒やら淡いピンクやら、少し地味な服装の教師達の中で、桜見先生の真っ赤なパンツスーツ姿は、非常に目立っていた。朝のホームルーム時は確か、ワンピースを着ていたように思うが。

こうしてころころと衣装を変えるのは、学校での桜見先生の、一つの趣味でもある。現在、桜見先生は真っ赤なパンツスーツを着ていて、それがまたびしっと決まっていた。すらっとした長身の桜見

先生は脚も長く、パンツスーツはそれを引き立てるためのものに見える。もしかしたらそれが狙いなのかもしれない。心なしか、桜見先生の隣に座る若い男性教師の視線が桜見先生の周辺をうろつろつとさまざまに見えよう。まあ、仕方あるまい。桜見先生はスタイルだけでなく、顔の造詣も綺麗だから。

「ん、来たね、更衣雨夜」

はい、と俺は答える。桜見先生は、生徒のことをフルネームで呼ぶ。癖なのだろう。

「用ってのはね、他でもない」

椅子の上でふんぞり返るように胸を張って、桜見先生は脚を組み、俺を見上げて言った。

「葉暮紅也のことだ」

……はい？

つい、変な声を出してしまった。

「葉暮紅也は知っているな」

ええ、まあ。クラスメートですし。

「あいつ、友達いないだろ」

まあ……そうですね。

「で、あたし、あいつに聞いてみたんだ。友達要らないのか、って」  
はあ。

何とも直接的な言い方ではあるが、……それが俺に何の関係があるというのだろうか。

「そしたらさ、何て言ったと思う？」

……さあ。

「更衣君となら、友達になりたいです、だとさ」  
な。

一言言って、絶句して。

そんな俺に、桜見先生はにやはは、と笑う。

「良いねえ、その反応。うん、でも本当だよ」

ええっと。……どうして、俺なんですか。

「うん。それがね、僕と似てるから、って言うんだよ」

似てる？ 俺がですか。

「ああ。いやあたしもね、お前とあいつは全く似てないと思ってるよ。だって、お前は話し上手で友人も多い。片やあいつはいつも一人で友達もいない」

ええ、まあ……。

曖昧に肯いておく。桜見先生の今言った『俺』というのは、本来の俺とはかけ離れているものなのだが。

「でも、似てるって言うんだよ。んで、担任のあたしとしては、何時も一人の生徒が他の明るい生徒と友達になりたいって言うのは、やっぱり叶えてあげたいわけなんだな。……分かるだろう？」

はあ。じゃあ……。

「葉暮紅也に話しかける」

……。

「話はそれだけだ。分かったら、返事」

……はい。

よしよし、と桜見先生は二回肯いて、俺に言った。

「じゃ、戻れ。もうそろそろ授業が始まる」

……はい。

しぶしぶ教室を出て行く俺の背中に、桜見先生は更なる追い討ちをかけた。

「良いか、あたしがシチュエーションを整えてやる。放課後に二人きり、教室でお前が話しかける。良いな？」

……。

「返事」

はい。

ああ、くそ。何が悲しくてクラスメートの男子と二人つきりにならなければいけないのか。桜見先生は絶対に楽しんでいる。俺が困っているのを見て、笑っているのだらう。全く、悪趣味だ。

放課後に二人きり、教室で俺が話しかける、ねえ……。

全く、何を考えているのだろう。

紅也も、桜見先生も。

理解できないけれど。

その努力すらも放棄して。

俺は、階段を上り始めた。

紅也？

俺が少々疑問型で問いかけると、紅也は、今初めて俺に気がついたとしても言うように俺を見、首を傾げた。

「何かな？ 更衣君」

いや……。

俺は、その大きな赤い瞳から視線を逸らして、

何やってんの？ 紅也。

「ん？」

紅也は、今まで動かし続けていた手を休めた。その白く細く長い指下にあるのは真つ白な紙。十枚ほどあるだろうか。それを紅也は、一つ一つ丁寧に、折りたたんでいる最中だった。

「まあ、ちよつとね」

そう言っつて、真つ白な花を思わせる微笑を浮かべる紅也。

時間は放課後、場所は教室。桜見先生により意図的につくられた密室空間に、俺と紅也の二人きり。そして俺は意を決して自分から話しかけた、というわけだ。

だが、紅也は俺以外に誰の影も見当たらないという一種異常な空間に、何の疑問も感じていないようだった。俺のことなど眼中になんかといった様子で、ただその白い紙を単調に折りたたみ続けているのだった。

こいつ……本当に俺と友達になりたいなんて言っただろうか？ そんなコトを思っていたら、不意に紅也がぐく、と笑った。何だよ、と俺が聞くと。

紅也は。

「言っつたよ。先生に。君と友達になりたい、って」

……！

いつの間にか口にも出していただろうか。

俺が紅也をまじまじと見つめると、紅也は笑みを浮かべたまま、

「君、『病気』でしょう？」  
そう言った。

「人に興味を持ってない、そういう『病気』。隠して、普通に暮らしてるけど」

黙ったままの俺に、紅也は。

「僕には分かるんだ。同じだからね」と。

真っ赤な瞳で、そう言った。

……同じってどういうコトだよ？　もしかして

「いや、僕は『病気』じゃないよ。でも、君と同じ場所に属している」

ひやりとした、空気が流れる。俺は、何も言えずに黙る。……い

や、紅也の言葉を、待っている。

紅也は、また。

のどの奥でくっくと笑って、俺を見下すように。あざ笑うように。俺を見上げて、言った。

「人に対する興味を忘れた人間ほど、哀しいものはないよね」  
嘲るような笑みを浮かべながら。

「だってさ、人間が他の人間に対して抱くべき当然の感情を持ってないってことはさ」

もったいぶって、紅也は言う。

「その人間は、どこまでも、本当に、真の意味で」

その真っ赤な唇を、片方だけ吊り上げて。

「コドクって、ことだものね」

俺を見下して。心の底から馬鹿にして。

葉暮紅也は、そう言った。

……。

「あ、怒っちゃった？　御免ね。でも、僕が本当に言いたかったのは」

言いたかったのは。

「そのコドクを、僕なら治せるよ、って」

.....

夕日が差して。教室は真っ赤に染まり。その中でも一際輝くルビ  
ー色の瞳が。

俺を、見つめていた。

そして。

紅也は口を開いた。

「君、僕と取引しない？」  
と。

教室は夕陽で血の色に染まり。

紅也はゆっくりと俺から離れた。

.....

口の中に残る、血の味。これは、どちらの血だろう。俺の血か、  
それとも紅也のか。

今のが、『契約』か。

唇をぬぐいながらそう聞くと、紅也は肯いた。

「まあね。悪魔である僕の血を、人間が飲む……それで、契約は果  
たされる」

じゃあ、これはお前の血か。

「うん」

紅也は微笑んで、机に寄りかかる。

「さ、ぐっといっちゃってよ。そんな厭そうな顔しないでさ」  
.....

俺は黙って咽喉を鳴らし、口の中の味を飲み下す。

まじい。

「失礼だな、雨夜君は。普通の血だよ」

口調とは裏腹に、紅也はまったく怒っていないようだ。  
そして。

赤い悪魔は、眼を細めて。心底楽しそうに、心底腹立たしそうに。どこまでも狡猾で、どこまでも善良な。

真っ赤な微笑を、浮かべた。

「では、取引はこれで終わりです。……帰ろうか、更衣君」  
いつもの葉暮紅也に戻って。

赤い悪魔は、そう言った。

お兄さんが、消えてしまったんだね？

その男は言った。全身白尽くめで、髪と目だけが黒い男。白いスーツに、白い背広。切れ長の目元に、薄い唇。唇の色も、薄い。その青白い唇は、笑みの形に歪んでいる。が、細められた目に、その気配はない。

背筋に寒気を覚えたけれど、私は震えた声で答える。

「はい」と。

白い男は、口を益々横に動かす。笑っているのか、そうでないのか。

白い唇の間から、真っ赤な口腔がのぞく。怖気が立つ。気持ち悪い、この男。

本当に、人間なんだろうか。

君は

男は、その口から不似合いな優しい声を出す。その落差に、私は一瞬身構える。

君は、お兄さんを取り戻したいのかな？

「はい？」

思わず、聞き返していた。

お兄さんだよ。君の、優しかった、お兄さん。いなくなってしまうっただろう？

「……………」

兄。

兄を取り戻したいか、と男は聞いた。なんと答えるべきか。私は。

迷わなかった。いや、迷いようがなかった。答えなど、一つしかありはしない。

私は。



が、少し笑っている。

いや、……気になる、っていうか……。

言葉に詰まる俺を見て、紅也は笑う。

「もしかして、自分だけ妹さんの事件について話すのは不公平だとか思った？」

そういうわけじゃ……。

「まったく、そんな、世の中全てギブアンドテイクって訳にはいかないよ。だから、ま、この話はお預けね」

……あ、そう。

「うん」

紅也はまた、窓の外を眺める。

何か見えんのか。

「うん、色々だね」

ふうん。

窓の外は快晴の青空。梅雨は終わり、もう夏が始まる。紅也が窓の外に何を見ているのか、ベッドの上の俺には分からない。悪魔の目に、何が映っているのか、写っているのか。俺には分かるはずもない。でも、そこに何かがあることは、確かなのだろう、と思う。

まあ良いか。

気を取り直して。

俺はまた、何度も読み返して筋を覚えてしまった本を、広げた。

「お兄ちゃん、」  
ふと。

妹の声が出たような気がして、目が覚めた。

……。

辺りを見回すが、妹の姿などない。当たり前だ。妹は今、俺と同じように何処かの病院のベッドで、眠っているはずなのだ。

「お兄ちゃん、早く良くなつて」

女の子の声は、俺の隣のベッドのほうから聞こえてきた。確か、隣には高校二年生の男の子が、入院していたはずだ。足を折ったか何かで入院しているのだと、聞いたような気がする。ということは、……その男の子の、妹か。

「大丈夫だよ。お医者さんも、あと二週間で退院できるって言つてたし」

男の子の声が答える。

「でも」

「大丈夫だつて。心配性だな、セツカは」  
セツカ……、か。妹の、名前……。

「うん……」

まだ少し心配げな妹　セツカ　の声に、兄は笑う。穏やかな関係。ほほえましく、……うらやましい。

うらやましい？  
いや。

俺は、本当は、うらやましくなんかないんだ。『病氣』である俺が、他人に……他人と他人の關係に、何らかの感情を抱くことなど、ありえない。『うらやましい』という言葉は、俺にとっては本当に、唯のコトバでしか、ないのだから。

だから、この感覚は、恐らく。

「錯覚だよ」

歌うような声が、頭上で聞こえた。目で確かめなくとも分かる。紅也だ。

「君の自己分析は、なかなか面白いね。感情を抱けないから『病気』だ、というんでなく」

ふふ、と笑う紅也。

「『病気』だから、この感情はおかしい、と考えるなんてね」  
何がおかしいのか。

俺か……？

「ああ、御免。僕、意味もなく笑うから。笑い上戸なんだ」

あ、そ。で、紅也。今日は何の用だよ？

「うわあ、ひどいなあ。友達がせっかく見舞いに来たっていうのに、オーバーなりアクションで、紅也は嘆く。もう個室ではないので、トーンはやや低めだが。」

見舞い、ねえ……。

疑わしげな目で紅也を見ると、紅也はまた笑いながら、座ることもせず、

「今日は面白いニュースを持ってきたんだ」

……ニュース？

「うん。今日まで言い忘れてたことなんだけど」

なんだよ？ 紅也がそこまで言うなんて……。

「凄いことだよ、ふふふ……」

おいおい。

ふふふ、って何だよ。

「じゃあ発表します」

こほん、と咳払いをして。

紅也は、その赤い瞳で俺を見下ろして。

「妹さんが、この病院に入院してるよ」

そう、言った。

……。

.....  
え。

出てきたのは、そんな間抜けな一言。紅也はそれを聞いて吹き出した。

「.....くっ。何、それ。君は本当に、おかしいねえ」

いや、それどころじゃねえし。紅也、.....それ本当か。

もちろん、と紅也は肯く。

嘘だろ、と俺は咳く。

「病室、聞きたい？」

.....念のため。

「444号室」

うえ。縁起悪。.....病院にそんな病室、普通ないだろ。

「それがあるんだね。なんでも、妹さん以外はそこに入った人はいないらしいね」

なんだ、それ。つまり.....、特別室みたいなもんか？

「そうだよ。まあ、詳しい話はまた後で」

言いながら、紅也は目で隣の兄妹を示す。俺も軽く肯いて、ため息をつく。

「君のために新しい本を持ってきたんだ。」

あ？

紅也が差し出したモノは、真っ赤な表紙の、本だった。

「でも……」

「大丈夫だつて。心配性だな、雪花は」<sup>せじか</sup>

僕は言つて、不安げな顔の雪花の頭を撫でてやる。

雪花は今、中学一年生で、僕がここに入院している間は祖母の家に泊まっている。これまでは僕と雪花の二人暮らしだったのだが、僕の足がこんなことになつてしまつては、雪花一人を家に残しておくわけにはいかない。

僕の足は、折れてしまった。丁度三週間前。バイト先で、誰かに押されて。

階段から、五階の高さから、一気に。

それで、複雑骨折と言つわけだ。誰が押したのかなんて分からないし、……そもそも興味が無い。誰が押したにしても僕の足はとてあえず治るわけだし、不幸中の幸いと言つべきか、頭を打つこともなかった。だから、そんな瑣末なことに興味はない。

そう思う。

勿論、雪花にはそんなことは言わない。余計な心配など、掛けたくないからだ。雪花は、心配性すぎるくらい、僕の身を案じてくれている。それは、僕が足を骨折する以前の……あの日のことが、あつてから。

あの日……、

両親の死を、間近で見ってしまったから。

一年前の、両親の命日。

妹の叫び声、泣き声、すすり泣き、嗚咽、ため息、目を見開いて。今でも、夢に見る。あの、悪夢を。いや、それは、夢よりも悪い現実。目は覚めないから、逃げることも、叶わない。

現実から逃げるには、狂つてしまつのが一番だ。でも、僕は狂つてしまえるほど、そのための『心』を持っていなかった。

両親の死に対して、僕は何の感慨も抱かなかったのだ。何も。

悲しみも憤りも。怒りも憎しみも。喜びは勿論のこと、喪失感すら。感じるものが、なかった。

喜怒哀楽。

僕に欠けているのは、一体何なのだろう。僕に『心』が欠けているなら、では一体。

雪花に対して抱くこれは、『愛情』ではないのだろうか。もしもこれが本当に感情ならば、それはつまり、僕に『心』がある、ということなのだろうか……。

「錯覚だよ」

歌うような声が、隣のベッドのほうから聞こえてきた。思わずびっくりとして、そちらのほうを見ると、ものすごい美少女が、隣に入院している高校生 少し無口 に、話しかけていた。見舞い、だろう。白い顔、黒い瞳、赤い 眼。

……………赤い？

「お兄ちゃん？」

雪花の声で、我に返る。

「どうしたの？」

「ん。いや、ちょっと、ぼーっとしてた」

笑って答えると、雪花はほっとしたように、僕の手を握った。

「お兄ちゃん、今度は気をつけてね？ 雪花、心配なんだよ？」

「大丈夫だって。僕だって、雪花のこと、心配だぞ」

言いながら、隣のベッドの主と話を続けている少女の言葉を思い出す。

そうかもしれない。この、雪花に対する『感情』は。

「……………錯覚、か」

「え？」

「いや、なんでもないよ。あ、もうこんな時間だ。雪花、おばあちゃん心配するぞ？」

「あ」

雪花は、二つ結びにした髪を揺らして、時計を見やった。

「本当だー……うん。じゃあ、もう帰るね、お兄ちゃん」

「うん。おばあちゃんによろしくな」

「分かった。また、来るからね」

ばいばい、と手を振って、僕は小さな雪花の背中を見送った。

これは、『愛情』と呼べるモノではないのか。

そんなことを思いながら。

ならば、僕はやっぱり……、『心』の何かを、失くしてしま

ったのだろう。

『今度は、気をつけてね？』

唐突に。

唐突に、雪花の言葉が耳に蘇る。……え？ 『今度は』、『気を

つけてね』、だって？

何だ、それ。

「……何だよ、それ」

呟きはしかし、口の中で渦巻いて、消えた。

階段を駆け上がった。

俺は、手近な部屋を覗く。……誰もいない。

次の部屋、いない。その次も、いない。

そしてどこにも、死体はない。

ぴちゃん。

水音が聞こえて、俺はほとんど反射的に、音が聞こえた方向へ走る。……浴室。

誰かいるのか？

浴室の前にあったバットを手に取って、俺はそろそろと近づく。

ぴちゃん ……ぴちゃん。

しゃあ、とシャワーの音もする。

誰か……

『がちや』、と。ドアを、浴室のドアを、開ける。

いるの ……

浴室には。

か……

そこには。

制服を血で真っ赤に染めた妹がいて。床には両親の死体があつて。血は、シャワーの水で洗い流されている真っ最中で。赤っぽい水が、妹の、靴下を濡らしている。妹は、黒々とした大きな瞳を中空に向けて、口を半分開けていて、つややかな唇は水滴を滴らせていて。全身びしょぬれで、まるで。

惨劇の場に居合わせた、一人の女神のようだった。

でも、女神の手には、一振りの。

包丁が。

この惨劇を作り出した、包丁が……妹の、手の中に握られていて。俺は。

俺は、それ以上その空間に足を踏み入ることは出来なくて。

ただただ目を見開いて、その、芸術作品とも言つべき、停滞した、どこまでも停止して動かない、揺るぎがたい『事実』に見入って、……立ち尽くしていた。危うい均衡、ぎりぎりの一線を、俺は越えたくなかったのだ。

しかし、そのまがい物の永遠は、やはり長続きしなかった。

妹は、どこも見ていない瞳で俺を捉えて、そして言った。

「……お兄……、ちゃん」

そして、動けずにいる俺の目の前で、ゆっくりと崩折れた。からん、と、包丁は乾いた音を立てて床に落ちた。

俺はようやく身じろぎをして、倒れた妹を見た。落ちた包丁を見た。切り刻まれた両親の死体を見た。

ええっと……………。

呟く声は、シャワーの音とともに床に散らばり、響きもしなかった。

こういう時、どこに連絡すれば良いんだっけ……………？

110番？ 119番？

警察を呼ぶべきなのか、救急車を呼ぶべきなのか。一瞬迷ったが、浴室を見て、決めた。

110番だ。

かくして警察は、30分かかって家に到着した。浴室に入った警察官が見たモノは、倒れた妹にすがり付いて離れようとしないう、半狂乱になった、俺の姿だったという。

あからさまに殺人現場で。

助かる見込みのある人間は一人もいなくて。

それどころか、皆死んでる気配がする。

そんな状況では、迷わず、110番にかけましょう。

「かわいい妹さんですね」

気付いたら、紅也は隣の高校生に話しかけていた。……おいおい、馴れ馴れしいな……。

「え……、あ、有難う御座います……。ってか、僕が礼言っでどうするんですかね」

照れたように笑う高校生。

「名前、セツカちゃん、って言っんですよね。雪の花、って漢字当てるんですか？」

「ええ、そうです。冬に生まれた花のような女の子、ってことで」

「良いですね。……あなたの名前は」

そう言いながら、紅也は彼のベッドの上に貼られたネームプレートをちらりと見て。

「ええっと……しんじじつ……？」

は？ 新事実？

「ああ、僕ですか？ あはは、そうなんですよ。新事実、と書いてアラタコトミと読むんです」

よく言われるんですね、とコトミ君は頭を掻いた。

「あ、ちなみに新が苗字です。だから妹は、アラタセツカ 新雪花、ってことですね」

「へえ、……珍しい名前ですねー……」

すう、と紅也は目を細める。

「ですよねー」

コトミ君は屈託なく笑う。

「あ、なんか突然すいませんでした。妹さんがあんまり可愛かったもので……」

「いえいえ」

紅也のわざとらしい弁解にもコトミ君は微笑んで、俺と紅也に礼

をして。

「ではまた……」

言って、ベッドとベッドの間を仕切る白いカーテンを、ゆっくり閉めてしまった。紅也はにこにこそれを見ていたが、カーテンが閉まりきってから気持ち悪い笑顔を浮かべた。

「ま、つかみはOKかな」

は？　つかみ……？

紅也の呟きに対する俺の問いは、完膚なきまでに無視され、紅也はまたしても邪悪な笑みを俺に向ける。

「では、話の続きといこうか、更衣君？」

……ああ。

俺は持っていた赤い本　　中身はまだ読んでいない　　をサイドテーブルに置き。

紅也が話すのを、待った。

「君、妹さんがどこの病院に入院してるか、聞かされてないでしょ、俺は肯く。」

そうだ。確かに俺は、妹が入院しているという病院を聞かされていない。

「理由は……分かってるんだよね」

ああ、分かっている。

俺は、……妹の血まみれの姿を見て　　。  
「極度の混乱状態、パニックに陥った」

そう、それで、その様子を見ていた親戚や警察関係者は俺の精神的な負担を考え、今となっては妹の唯一人の肉親である俺に、妹の入院先を告げてくれなかったのだ。そして今も……俺は、妹の居場所を、聞かされてはいない。

でも　　。

こここの病院の、444号室、……なんたる。

「うん。悪魔の情報網は確かだよ。で、君……この病院の名前も、

当然知らないわけだね」

そういえばそうだ。他人に対して興味を持ってないのは仕方ないにしても、自分が入院している病院の名前くらい知っておかなければいけないだろうに。

「まあしょうがないよ。だってこの病院、入院患者にわざわざ病院名なんて告げないもの。まあそれはともかく、妹さんと君が同じ病院に入院している……この状況、君の親戚はどうも思わないのかな？」

思わないんじゃないの？ 今だって、一度も見舞いに来てないし。

「ふーん……まあ、そうみたいだね、うん。じゃ、本題といこうか。ええっと、妹さんの入院している444号室が特別だってコトは言ったよね」

ああ。あいつ以外、入ったことがないって言うんだろう。

うん、と紅也は肯いて、椅子に座った。

「その理由なんだけどね」

妹さん、実は一度、目を覚ましたんだって。

なんだって？

俺は馬鹿みたいに口をぽかんと開けて、

目を、……覚ました？

呟いた。

俺の妹は、444号室に入れられる前、何号室だか、別の病棟の部屋に入院していたという。しかし、そのとき。

一度だけ、眼を覚ました。

運ばれてきて、眠り続けていた妹は、入院してから丁度二ヶ月目に、眼を覚ましたのだ。こん睡状態だった患者が眼を覚ましたとあって、担当医や看護師らが集まっていたらしい。

が。

「君の妹さんの病室に集まってた人間、皆……死んじやってたんだって」

そう。

紅也の言葉通り、俺の妹が目覚めてから一時間もたたないうちに病室に集まっていた医者か看護師全員、傷だらけで死んでいたというのだ。紅也は何故か、それを発見した一人の看護師の話も聞いていて、

「何でもね。医者とか看護師の死体に囲まれて、君の妹さん、また眠ってたんだって」

などと言う。

死体に囲まれて、再び眠り続ける妹。

考えられる可能性は三つ。

一つは、妹が医者やら看護師を殺してしまっただけから、また眠りについた。

もう一つは、妹以外の第三者が、妹以外を殺して出て行き、妹はまた眠った。

そして、最後。妹は最初から起きてなんていなくて、集まっていた医者達は他の人間に殺された。

「まだあるけどね。つまり、妹さんが起きていたとしても眠っていたとしても、集まっていた医者達が殺したとか。ああ、そ

れに、発見したって言う看護師さんも、怪しいといえば怪しいよね」  
それにしても……………、集まっていた医者と看護師総勢七人を。  
一時間以内に全員、殺したというのか。

そして、その間、誰も、誰もその惨状に、気付かなかった。  
気になることはまだある。

妹が眼を覚ましていたとして、また眠ってしまったのは仕方ない  
だろう。が、しかし……………妹が眼を覚ましたというのがデマだったと  
したら、……………。

いや、この疑問は、今考えても仕方のないことだ。  
ともかく。

今はつきりと分かっているのは、『妹の病室に集まっていた病院  
の人間が、全員死んでいた』という事実のみ。そしてその『事実』  
により、妹は『特別室』とも言える、現在の444号室に移された  
のだ。

「ここがどうして『特別室』なのかというよね。まず第一に、他の  
病棟から物凄く離れたところに、『立ち入り禁止』の文字までつけ  
て、隔離されているということ。勿論、担当医でも決して一人では  
行かない。二人か、若しくは三人連れで、診察に行くんだって」

紅也はどこか楽しそうに、そしてどこか皮肉げに。薄く笑いなが  
ら、そう話す。

「それと、もう一つはね。決して、内側から出られない。鍵は担当  
医の声紋なんだったさ。徹底してるよね」

じゃあ、もし妹が担当医の誰かを殺すなんてことがあれば……………。  
「そ。もう二度と、妹さんは自力では出られない。病院側が錠を開  
けない限り、太陽も月も、見るコトはできなくなる」

そうか……………。

「ん？ どうかしたのかな……………妙に落ち込んでるねえ」  
ククク、と含み笑いをして俺の顔を覗き込む紅也に、別に、と応  
える。

あいつは、人を殺したりなんか、しないからな。

「ふうん？ ……ま、どうでもいいけどね」

紅也は、本当にどうでもよさそうに俺から離れた。

「ま、ともかくそういう訳。理解した？」

……まあ、それなりに。 ……あ、そういえば。病院の人間は、俺があいつの兄だって知ってるのか。

「当たり前でしょ。だから、多分替えてるね」

え？

「だってさ、死体の中で眠ってた女の子の兄だよ？ 普通の人間なら、怖がるよ」

……ふうん。

それならそれで、もっと待遇を良くしてくれても良さそうなものだ。入院というのは、どうも窮屈で面白みに欠ける。もっとも、普通に夏休みを送っていたとしても、俺に面白みのある何事かなど、起きることはなかっただろうが。

「贅沢言わない。 …… っていうか、君結構他の患者さんと扱い違うよ？ 気付いてないだろうけど」

そうなのか？

「うん。病院食の、デザートの量の割合とか ……、あ、あと君のところには、この病院内の綺麗どころの看護師さんが交代で来てるらしいよ」

……。

どうも俺は、薄っぺらい人間だと思われているようだ。

「それで、感想は？」

紅也はにやにやと、俺を見下ろす。窓からの光りが、眩しい。 ……

あいつは、もうこの光りを、見ることが出来ないのだろうか。

俺は目を細めて、紅也を。赤い悪魔を、見上げる。

そして。

どうもこうも …… 最悪だな。

そう言った。

カーテンを閉めてから、僕はリュックサックに手をつっこんで、iPodを出した。本体にぐるぐると無造作に巻いたイヤホンを、ねじれには構わず、耳にはめる。隣の、カーテンで仕切られたわずかばかりのプライバシーを、侵したくはなかった。あの美少女と高校生の男の子が、どんな会話を交わすかなんて、僕には何の関係もない。まあ、興味はあるけどさ。

音量を最大にして、とりとめもないことを考える。

雪花のこと、祖母のこと、学校のこと、e t c .

入院生活というのは退屈だ。本を読むか音楽を聴くか、寝ているかしかない。テレビという選択肢もあるにはあるが、一ヶ月あまりの入院中、そんなことにお金をかける気はない。何と言っても、退院後の雪花との暮らしのために、削れるモノは削っておかなくてはいけないのだ。ただでさえ、僕の入院費で切羽詰っているのだから、『辛かったらいつでも来なさいよ。事実一人では大変でしょう？』

祖母の言葉。

祖母は祖父と死に別れて、今は一人暮らしだ。三人なら丁度良い、といってくれたのだが僕はその申し出を断った。……いや、保留した、というべきか。できるところまでは、二人でやっていききたかった。やるべきだと思った。

僕は、兄だから。

雪花の、たった一人の、兄だから。

だから、二人で生きていくことを、決めた。

曲が終わった。次に流れる曲は、まだ両親が生きていた頃の思い出を蘇らせる。嫌だ。思い出すのは、辛く、悲しい。

自然と、一年前のことを、思い出していた。

一年前。

僕は学校から帰ってきて、家のドアを開けた。



声も出せずに。そこに仲良く並べられた二つの死体を見つめ続けて。

『あああああああつ』

目を瞑ることもせず。

流れ続けるシャワーにも構わず。

後ろで泣き続ける雪花のことを、思い出しもせず。

両親の死体を、見つめ続けて。

『あ……………はは』

涙なのかただの水なのか。それとも、シャワーの水滴なのか。

よく分からないものが、自分の顔を濡らしているのを、感じていた。

「うわ、雨だ」

カーテンの向こう側からの声が、僕を我に返した。……………雨。

「あーあ……………僕、傘持ってきてないんだよねえ。……………困ったなあ」

先ほどの少女のものだろうか、この言葉は。

……………って、え。

今、『僕』って。

……………あはは、ま、まさか。あんな可愛い男が居るわけない。うん、まったくそのとおり……………。今のは聞き間違いということにしよう。

僕は気を取り直してカーテンを開ける。

「あのー……………僕の傘、折りたたみでよければ貸しますよ。今度来たとき返してもらえれば良いので」

「えっ……………？ 良いんですか？」

少女はぱつと顔を輝かせる。……………うっ、眩しい。

「いやあ、持つべき者は友達の隣人」

有難う御座います、と少女は微笑んで、僕が渡した傘を受け取った。

「いえいえ、入院していたら、使うこともないですから……………」

ああ、今僕の顔は耳まで真っ赤になって居るに違いない。何せ、

こんな美少女だ。……可愛すぎる……。

「コトミ君って、優しいですね。更衣君が何かと迷惑かけるかと思  
いますが、仲良くしてやってください」

「は……はあ……」

まるで母親のような言い方に、思わずたじたじとなる。

あ、アラタ君。こいつの言ってることは聞かなくて良いから。

隣人、更衣雨夜さんは、ぶっきらぼうにそう言う。

「はあ……」

「まったく、愛想つてものを、欠片ほども持っていないんだからね、  
更衣君は。コトミ君を見習うべきだと思っな」

うるさい、この猫かぶりめが。

「……手厳しいな。……じゃあ、そろそろ僕は行くよ。傘、どうも  
ありがとう御座います、コトミ君」

それじゃまた、と少女は病室を出て行ってしまった。はあ、とた  
め息をついて病室のドアを見つめる僕に、更衣さんは言う。

うるさいのが居なくなって、ほっとするな。

「え……、あ、えーと」

言葉に詰まる僕に、更衣さんはくははと笑った。

君、素直でいいやつだな。何だ、あの悪魔に惚れたか？

「っ……いや、あの」

……ってか、アクマ？ ……ああ、小悪魔、みたいな意味かなあ。  
気にしないでくれ、と更衣さんは言う。

男が男に惚れるわけないしな。

「……」

え。

今、なんと。

仰いましたか。

「ええつと。あのお……」

うん、だから、ほんの冗談だ。怒らないでくれよ。

悪びれた様子もなく、微笑む更衣さん……。

「あの……ってことはですね？ さっきの方は」

え？ だから、あいつは……って、何、もしかして君……。

「……………」

……………。

「……………」

……………。

長い沈黙。

「……………」

ま、まあ何だ。あんなナリしてりゃ、間違えても当然だよ、な。だからそう、落ち込むことはないさ。

「……………」

おい、アラタ君？ 大丈夫か？

「男、……………ですか」

うん、真正正銘。

肯く更衣さん。……………ああ、何てことだろう。

「あんなに可愛いのにですか？」

うん。そう。君、やっぱりあの悪魔に惚れ……………。

「そんな……………。嘘だ……………。あんな長い黒髪で、男なはずが……………」  
シヨックをつけ、打ちひしがれる僕には、更衣さんの言葉は届かない。

……………あー、あいつ、本当悪魔だなあ。こんないい少年に、……………  
罪作りなやつ。

「そんな……………」

可哀想にな、アラタ少年……………。

相変わらず無表情な目で、更衣さんは小さく呟いた。

「はい、雨夜君の分のお食事ですよー」

語尾にハートマークをつけたような言い回しで、この病室の担当の看護師が病院食片手にやって来た。病院内の綺麗どころ、ねえ。礼を言いながら、俺は紅也の言葉を思い出していた。まあ確かに美人といって良いだろう女性ではある。……でも。

「はい、雨夜君、あーんして」

……。

「あれ？ 食欲ないのかな？ じゃあおかゆに変更して」

いえ、結構です。一人で食べられますから。

「あらそう？ 良いわ、雨夜君がそう言うなら仕方ないわね」

分かったよ、と言って看護師は身を引いた。微かに花の香りがした。

「私の助けが要りそうなときは、ナースコールで呼ぶのよ」

最後にウインクをして、看護師 いたるか 至夏みちるさんは、カーテン

を勢いよく閉めていった。

……。

あの性格は、一体どうということなのだろう。「あーんして」、って。俺は幼稚園児か。

少しウェーブのかかった茶髪を後ろで束ねており、好奇心一杯の丸く大きな黒い瞳を輝かせ、いつでも自信に溢れた態度で歩く、至夏みちるさんは、そういう人だ。確かに、美人である。

でも。

それでも、紅也には敵わない、と思ってしまう俺がいる。……あいつは男だけだ。

ま、あいつ人間じゃないしな。多分、あの体も自分で創ったものだろう。美的センスはなかなかです、ってか。

……それにしても、と、食事に手をつけながら考える。勿論、

今、隣でみちるさんの拷問にも等しき所業の格好の餌食になっているであろう、アラタ君のことである。

ああ、気の毒なアラタ少年。あの赤い悪魔に一目惚れとは……。外見だけで言えば、確かにあいつは女子にしか見えない。でもなあ……さつき、あいつは学ランを着ていたはず。男子制服着用でも、女子　しかもアラタ君の言によると美少女　に間違われるあいつは、やはりアクマだ。

アラタ君は、素直で良い少年だ　と、思う。少なくとも、見た人間にそう思わせる雰囲気を持っている。まあ、俺はそういうものを上手く感じ取れないので、それは本当に、見たままの印象に過ぎないのだが。だから、『気の毒な』アラタ少年、というのも、印象を言葉にただけであって、俺の感想、というわけではない。

俺の言葉はいつもそうだ。

何を言っても、現実感を伴わない。何をしても、何をしても俺に、関心というものが、欠けている限り。

多分、一生こうなんだろう。

『君は、僕と似ているからね』

紅也の言葉が浮かぶ。あいつが？　俺と、似ている……？　んな馬鹿な。

一笑に付す。一体、どこが似ていると言っただろう。俺と、あの悪魔が……。

そういえば　……。

「それじゃ雨夜君、お大事に」  
ウインクどころか投げキッスまで寄越してくれたみちるさんに軽く笑って、カーテンを閉めて。みちるさんの、去っていく足音を聞きながら。

俺は、紅也が残した本を持ち上げる。普通のハードカバーと同じサイズで、表紙に何も書いていないという以外は、本当に極々普通の本である。……いや、悪魔がくれたというだけで、もう普通ではないか。

……………さて、読むか。  
そう思って、本を開いた、それと同時に。  
病室は、真つ暗になった。

「あの……………、更衣さん？」

僕がおずおずと声を掛けると、更衣さんの落ち着いた声が返ってきた。

なんだ？

「えつと……………、消灯時間、早すぎませんか？」

だよな……………。俺の勘違いかと思っただけど、……………やっぱり、おかしいよな。

真つ暗闇。窓際の更衣さんはそうでもないのかもしれないが、僕のほうはそうもいかない。正に、自分の手すら見えない本当の暗闇。さつさと寝ろ、ってことじゃあ……………ないよな、やっぱり。

「ですよー……………」

どうやら、消灯されたのはこの病室だけではないらしい。廊下を伝って、他の患者のざわめきが聞こえてくる。

ナースさん、どうなってんの……………？

何？ 停電？

消灯時間じゃないですよ……………。

そんな感じで、皆ざわめいている。

「何でしょう……………」

まあ、そう不安がることもないさ。大方、照明器具の不備だろう。停電だったとしても、すぐに予備の発電装置が動き出すさ。

あくまで落ち着き払った更衣さん。

「……………それもそうですけど」

しかし、何故こつも更衣さんは落ち着いていられるのだろう。性格、なのかな。時々いる、若いのに老成した感じの……………更衣さんも、そうなのかもしれない。

とか何とか考えているうちに。

『チカチカツ』と音を立てて、電気が復旧した。

「あ、灯きましたね」

「本当だ。」

「何だっただんでしょね……、あ、至夏さん」

え？ あ。

更衣さんの眩きと同時に、至夏さんの声が響いた。

「皆ー、御免なさい、驚いたでしょう？」

その声に呼応して、同じ病室に入院する患者達が一斉にざわめきだす。

まったくじゃ、みちるさん。一体何があっただんだい。

みちるちゃん、怖かったよーう。

お年寄りの入院患者が、まるで至夏さんを神として崇める一神教の信者のようにどよめいた。それに答えるように、みちるさんは笑顔で病室の全員に呼びかけた。

「何かこちらの手違いで照明の電気だけ落としてしまったみたいなの。だから、機械が壊れたり止まったりはしていないから、安心して」

一斉に安堵のため息をもらす患者達。至夏さんは向日葵のようににっこりと笑って、それじゃあおやすみなさい、と言い置いて、また去っていった。どよめきはすぐに収まり、老人患者達は静かになる。

「何だ……、機械の操作ミス、とかですかね」

……。

僕は更衣さんに向かって言ったつもりだったのだが。

沈黙以外、何も返ってこない。

「あー、……更衣さん？」

さっきとそっくり同じ言い方をしてしまう自分の語彙の乏しさに赤面しつつ、僕は再度声を掛ける。

「えっと……」

アラタ君、悪い、俺ちよつと便所行ってくる。

「え、あ、はい」

ぎし、とベッドが軋む音がして、また静かになった。病室から出て行ったのだろう。老人患者達はもう寝てしまったようで、病室内で起きているのは、僕だけになってしまった。

もう、何の音もしなかった。

明かりのついた廊下を、俺は歩く。歩きながら、さつき読んだ本の一節を思い出す。

さつき。

真つ暗だった病室に明かりが戻った時。その瞬間、俺の手元に開きっぱなしだった、あの本の最初のページが、目に飛び込んできた。『世界に灯の戻る時、それは始まる』

紛れもなく、紅也の字だった。

どうやらそれは、本というよりも、紅也の、俺に対する書置きのようなものであるらしかった。世界、というのを俺にとつてのものとして考えると、『灯の戻る時』とは、今を置いて他にない。しかし、『それ』というのは何だろう。……紅也のやつ、どうしてこう、謎掛けのようなことをしてくるのか。

ともかく、今、何かが始まっていることだけは確かであり、見たところ俺の病室にはこれといって変わったところはなかった。とすると、他の病室のことを言っていると考えて良いだろう。

あいつがこの出来事を予知していたこと自体は、別におかしいことではない。悪魔だし。そして、わざわざ他の人間に聞かれないように（としか考えられない）『本』という形で『それ』が起こる、と教えてきた……ということは。

俺と『それ』とは、何らかの関わりがあるものと見て良いだろう。

ま、もしかしたら紅也との契約のほうに関わってるのかもだけど。

それなら　それならば。

さつさと動いた方が、良いんだろう。

そう思っつて、俺は病室を出たわけだ。アラタ君を独りにするのは少し可哀そうな気もしたが、仕方ない。

トイレの前を通り過ぎ、俺は歩き続ける。まだ、何も見えてこない。

そういえば、本の次のページから先には、何も書いていなかった……なんだろう、続きは悪魔の特殊なペンか何かで書かれているのだろうか。

もう、俺の病室から最も離れた病室は、すぐそこまで見えてきた。今のところ、何の異常も見られないが……、この階ではないのか？

俺は給湯室の前を通り過ぎ ……、

え？

そして、立ち止まった。

給湯室だけ、真っ暗だった。いつもなら、消灯時間でさえも薄く灯が灯っているはずなのに。……なんだ、ろう？

妙に気になって。

俺は、給湯室を覗いた。中を確認して……。

そして、急いでナースセンターまで走った。

給湯室には、一人の看護師がいた。

胸に、刃物が刺さっていて。

勿論、血が流れていた。真っ赤な血が。

そして、倒れていた。俺は彼女に駆け寄ろうとしたが、その拍子に何かに躓いた。

見ると。

その、俺の足元に倒れていたのは、一人の少年だった。

よくよく見てみると、少年もメッタ刺しにされていて。

看護師の方は、その少年をかばうようにして絶命しているようだった。

恐らくは、ここに現れた第三の人物が、彼女ら二人を殺したのだろう。看護師は、たまたま少年が殺されそうになっていたのをかばい、殺された……。の、か？

もしかしたら、初めから二人でいたのかもしれない。でも、そんなことや何やかやは関係なくて。

やっぱり、そこには二つの死体があるばかり。

紅也の予想通り、『それ』は始まったのだった。

病院中、ぴりぴりしていた。何せ、一夜で人が二人も殺されたのだ。

病院だから、死体など珍しくもないだろうが、殺人死体だ。勝手に違うだろうし、何と言っても気味が悪いだろう。

いや……、人として当然の感情を持っている人間なら、気味が悪い以前に、『恐怖』というものを抱くのだろう。

『殺人』という行為に対する恐怖。

『殺人者』という見えざる者への恐怖。

そして何よりも、『殺人が行われた』という事実に対する恐怖。だからだろうか。

病院中が、重苦しい雰囲気にもまれていた。

俺は勿論警察への対応に追われていた。しかし、必要事項を全て供述してしまうと、突然暇になってしまったのだった。まあ、冷静にしすぎているとかえって怪しまれてしまいそうだったので（なにせ俺は、トイレに行くとか言っておきながら、その前を通り過ぎ、何の用事もないはずの給湯室まで足を伸ばした人間だったから）、普段どおり、『更衣雨夜』を演じたのだったが。

本当に、驚きました。一瞬眠ってるのかと思っただけですか……。

嘘だ。

それも、ついた本人がいやになるほど、善人ぶった、嘘。

確かに、被害者は二人とも、眠っているのと同様うほど安らかな死に顔をしてはいたが……、俺は別段、それに驚いたわけではない。どちらかと言えば、人が死んでいるのに驚かない自分に対しての驚きの方が大きかった。成程『病氣』というのは、死人に対しても通用するのだな、と、冷静に分析している自分に対する、驚きの方がさ。

被害者は二人。二人とも、死因は失血死。ま、そんなところだろう。

看護師の方の名前は、桜坂<sup>さくらざか</sup>花卉<sup>けい</sup>。二十五歳、子供好きで良く働く、患者にも仲間内にも評判の良い女性だったそう。怨恨の線も、金や情事のもつれなども、今のところなさそうだということだ。

そして、彼女に庇<sup>かば</sup>われながらも命を奪われた少年の名は、宇押<sup>うおし</sup>友<sup>とも</sup>二<sup>に</sup>。若干十二歳にして、この世を去った。彼も勿論、殺されるような何かがあったわけではない。十二歳でそんなものを背負っているはずが無いのである。

そんなわけで、警察は通り魔的犯行と見ているようだが、まさか夜中に病院外部から侵入できるわけもないので、昼間のうちにどこから忍び込んでいたのだらうという考えが主のようだった。

「ま、そう心配しないでください。犯人は、多分もうここにはいないですし。……ね？」

そんな馬鹿なことをほざいた阿呆刑事の名は、確か……………。  
何だっけ。

まあ良いか。とにかく、警察はただの通り魔と見ているようで、儀礼的な調査を終えると、とつとと帰ってしまった。まったく、適当な刑事だった。何でも、今丁度街中でナイフ通り魔が流行っているようで、そちらの方と一緒にされてしまったらしい。

「あのー……更衣さん、大丈夫ですか」

「ぼーっとしていた俺を気遣って、アラタ君は心配そう。見舞いに来ていた彼の妹、雪花も、俺を不安そうに見つめている。

ん、大丈夫。なんかちよっと、釈然としなくてね。……そんな顔するなよ、アラタ君。

「でも……、やっぱり、死体、見たわけですし。……ショック、ですよね」

ん……………。

別に、死体を見たのは二度目だし、一度目の方がショック大きかったし。大してそのことについては、何の感慨も抱きはしなかった

のだが。……そうか。アラタ君のような少年は、そういつたことに  
対して弱いのが、普通なのか。

「お兄ちゃん、ケーサツの人、どうしても帰っちゃったの？ 犯  
人とか、捕まえなくて、いいのかな？」

雪花が、不思議そうにアラタ君に聞く。

「ああ……えっとね、この病院内には、もういないって思ったんだ  
よ。それに、きっと本当に、もう犯人はいないよ」

「本当？」

「うん。だから、雪花もそんなに心配しないで」

「うん……」

兄妹間のやり取りを、俺は黙って聞いていた。いや、  
聞いていなかった。

とても。

とても、ひっかることがあった。

妹の存在。

この病院に居るといふ、俺の妹。

あいつ、……疑われてたり、しないかな。

でも、でも、……大丈夫、だろう。紅也が言っていたことが本当  
ならば、妹は病室から抜け出せないはずなのだ。でも、それでも、  
やはり。

病院の人間は……。

「そういえば、今日」

不意に、アラタ君が声を上げた。

え？

「あの、……紅也、さん……来てない、ですね」

あ、……。

確かに、あの悪魔は今日、見舞いに、来ていない。

さつきから、更衣さんは上の空だ。何を話しかけても、生返事。やはり、シヨックが大きかったのだろうか。死体……それも、二つ。それも、惨殺死体。

宇押友二君とは、何度か顔を合わせたことがあった。話したことはなかったけれど、明るい感じの、いい子だった。

そういえば、看護師に、退院が近いことを嬉しそうに話していたのを覚えている。退院したら、サッカーをもう一度やるんだとか。  
ん……………。

そうだ、そのときの看護師が、殺された桜坂さんだった。桜坂さんは子供好きだったと聞いている。それで、よく話していたのだから。

……………二人とも、つい昨日までは、この病院内で生きていたのだ。

それを思うと、少し気分が悪くなった。でも、これも。

「……………錯覚、か」

「何か言った？ お兄ちゃん」

「うっん、なんでもない。……………あ、何かデジャブった」

「……………？」

僕のたわごとにも、雪花は首をかしげる。

「いや、こつちの話。……………ああ、そういえば」

僕は、更衣さんのほうを向いて言う。

「今日、あの……………紅也、さん来てないですね」

あ……………。

更衣さんは急にはつとしたような表情になる。

確かに来てないな。……………珍しい。

言いながらも、何か考え込む様子を見せる更衣さん。あの美少女……………じゃなかった、紅也さんが更衣さんの見舞いに来ないなんて、

初めてのことだ。相当仲が良いのだろう、いつも楽しそうに会話を交わしているというのに。

「更衣、さん……」

……ん？

「あの……、仲、良いですよ。紅也さんと。付き合い、長いんですか？」

……。何だつて？ ゴメンアラタ君、なんか俺、急に耳が遠くなったみたい。……もう一度言ってくれ。

どことなく、驚いたような、いやそうな、そういう表情をする更衣さん。……僕は何か、悪いことを言っただろうか。

「いや、その。……紅也さんと仲良いですけど、付き合い長いんですか？」

……。いや、一ヶ月くらいの付き合いだよ。入院日数も含めて。

「え？」

それに、仲は良くない。どういう風に見えるかは知らないけど、仲が良いなんてことは、断じてない。

「……」  
いつになく真剣な面持ちで言う更衣さんに、僕は何も言えずに肯く。

あいつ、変わってるんだよ。アクマだし。

「……」

困惑する僕に、その言葉の意味は分からない。

ま、そういうわけさ。でもね、アラタ君。

「はい？」

更衣さんは、僕の目を、相も変わらず無表情な目で見つめて言った。

絶対に、俺はあいつと、仲良くなんかない。

「……はい……」

分かってくれば良いんだ、と更衣さんは笑った。

すみません、と、僕は訳もなく謝った。

「何々？ 二人とも、随分楽しそうにおしゃべりしてるじゃない…」

突然の、華やかで明るい声に、僕と更衣さんは振り向いた。そこには、至夏みちるさんが立っていた。

「雨夜君、もう刑事さんたちのお話は終わったの？ …… 大丈夫だった？」

笑いかけるその顔に、一瞬、暗い影がよぎったような気がした。更衣さんは、はい、と肯く。

「そう、… 良かった、何ともなくて。それで、ちょっと話があるんだけど ……、ついて来てくれる？」

話、ですか？ ここでは…。

「ごめんなさい、ちょっと個人情報絡んでくることだから、大っぴらには話せないの」

珍しく言葉を濁し、目線を反らす至夏さん。更衣さんはそれに気付いたのか気付いていないのか、分かりました、と即答した。至夏さんはどこかほっとした様子で、それじゃあ、と続けた。

「それじゃあ、行きましようか。ごめんねアラタ君。ちょっと、雨夜君借りるね」

力なく笑う至夏さんと、沈黙してしまった更衣さん。

僕は、病室を出て行く二人を、見送ることしかできなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1589r/>

---

赤い瞳で悪魔は笑う（仮題）

2011年7月7日03時31分発行